岐阜大学地域科学部研究報告第 44 号： 49 － 53（2019）

岐阜大学地域科学部学生の TOEFL iBT 得点獲得傾向

牧　　秀　樹

（2018年10月16日受理）

Gifu University's Faculty of Regional Studies Student Scoring Trends on the TOEFL iBT

Hideki MAKI

Abstract

This paper examines Gifu University's Faculty of Regional Studies student scoring trends on the TOEFL iBT, and shows (i) a strong correlation between the scores on reading and listening and the scores on speaking and writing, (ii) a relatively strong correlation between the scores on listening and the scores on speaking, and (iii) the fact that for Gifu University's Faculty of Regional Studies students, the listening and speaking skills are inferior to the reading and writing skills.

1. はじめに

昨今、英語能力には、4 技能があると言われる。読み、聞き、話し、書きである。しかし、どの研究者も、この 4 技能が本当に独立した技能であるか、統計によって証明していない。そこで、これら 4 技能の間に、あるいは、ある 2 技能と別の 2 技能の間に、相関があるかどうか明らかにすることを目的に、本調査を行った。

本調査のために、TOEFL iBT の得点を利用した。TOEFL iBT には、読み、聞き、話し、書きの各技能ごとの試験があり、したがって、各技能ごとの得点が得られる。ただ、TOEFL iBT は、日本においては、その受験料は、235 ドルであり、2 万 5 千円程度かかるため、大量のデータが、これまで得られなかった。その中にあって、岐阜大学地域科学部では、2016 年 4 月より、国際教養コースを設置し、留学に当たっては、TOEFL iBT の決められた得点を満たさなければ、留学できないため、2016 年より、少しずつ、TOEFL iBT の得点が得られるようになってきた。国際教養コースの特徴は、学部 2 年次後学期より、3 年次前期にかけて、10 カ月程度留学し、留学期間中の単位を岐阜大学の単位に読み替えることで、他のコースの学生と同様に、4 年間で卒業できるというものである。

本調査では、これまで、岐阜大学地域科学部、あるいは、大学院修士課程地域科学研究科に所属し、TOEFL iBT を受験し、かつ、その得点を、本調査のために使用してもよいと宣言してくれた学生 34 名の得点を利用し、岐阜大学地域科学部学生の英語の 4 技能の特徴について明らかにする。

本稿の構成は、以下である。2 節で、この調査の方法を述べる。3 節で、調査結果を提示し、4 節で、それに基づいた議論を行う。5 節で、本調査の結果を要約する。

2. 方法

2016 年 4 月より、2018 年 9 月までに TOEFL iBT を受験した岐阜大学地域科学部学生・地域科学研究科大学院生 34 名のデータをもとに、岐阜大学学生の TOEFL iBT の得点の傾向を調査した。受験者は、留学した・しなかった、あるいは、留学する・しないに関わらず、留学を希望していた・希望している。各学生は、多くの場合 2 回以上受験し、最も多い場合は、5 回ほどになるため、その個人の得点獲得傾向が全データに影響を与えかねないため、各学生の最高得点のみをデータとして使用した。統計処理には、相関分析と単回帰分析を使用した。

3. 結果

分析の結果、明示的な結果が三つ得られた。以下では、相関係数が重要になるため、その概略を表 1 に示す。

表 1: 相関係数とその性質（柳井（1988））

相関係数	性質
$0 \leq r \leq \lvert.2\rvert$	ほとんど相関がない
$\lvert.2\rvert \leq r \leq \lvert.4\rvert$	やや相関がある
$\lvert.4\rvert \leq r \leq \lvert.7\rvert$	相関がある
$\lvert.7\rvert \leq r \leq \lvert.9\rvert$	強い相関がある
$\lvert.9\rvert \leq r \leq \lvert1.0\rvert$	極めて強い相関がある

表 1 は、相関係数が、.7 以上あれば、ある二つの項目・変数の間に、強い相関があることを示している。

以下、表 2 に、34 名のデータにおける、4 技能（読み、聞き、話し、書き）、読み＋聞きの合計、そして、話し＋書きの合計の間の相関を示す。

表 2: 各技能の得点間の相関

N=34	総合得点	読み	聞き	話し	書き	読み+聞き	話し+書き
総合得点	1						
読み	.72	1					
聞き	.80	.32	1				
話し	.86	.46	.69	1			
書き	.81	.50	.49	.64	1		
話し+書き	.93	.82	.81	.70	.61	1	
読み+聞き	.92	.53	.65	.91	.90	.73	1

さらに、この 34 名の各技能の得点の平均点を表 3 に示す。

表 3: 各技能の得点の平均点

N=34	総合得点	読み	聞き	話し	書き	読み＋聞き	話し+書き
	60.09	16.65	13.68	13.94	16	30.32	29.94

4. 議論

上記のデータより、特筆すべき点を 3 点あげる。

4.1. 読み＋聞きと話し＋書きの間の相関

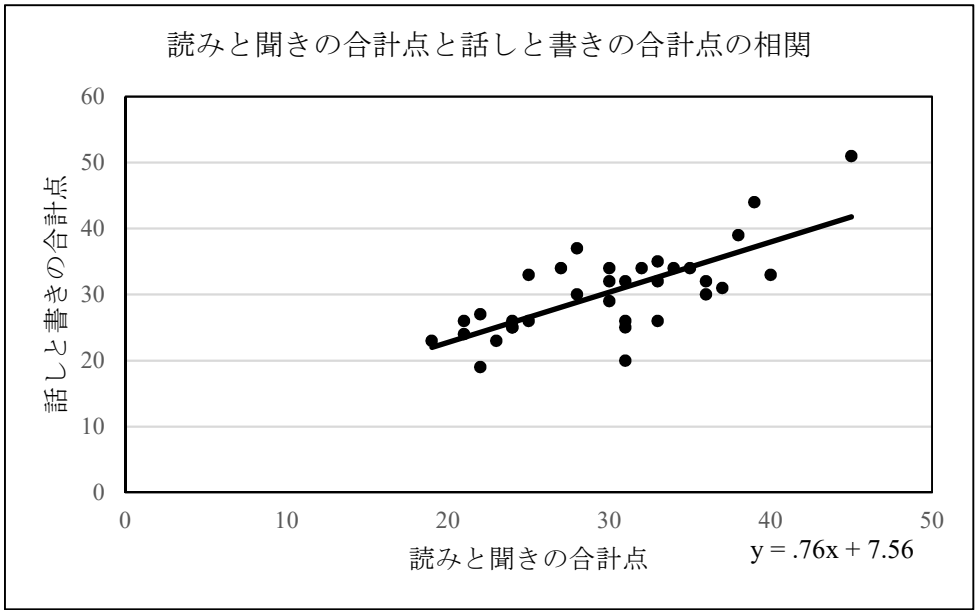
読み＋聞きと話し＋書きの間に強い相関がある。相関係数 r は、r = .73 である。単回帰分析の結果、この相関の強さは、統計的に有意であると言える。（p < .05 である場合に、統計的有意であると言う。）単回帰分析の結果は、表 4 に示される。

表 4: 読み＋聞きと話し＋書きの間の相関

回帰統計	
重相関 R	.73
重決定 R2	.53
補正 R2	.51
標準誤差	4.58
観測数	34
p 値	p < .001

同結果は、図 1 で視覚的により明示的に示される。

図 1: 読み＋聞きと話し＋書きの間の相関



4.2. 聞きと話しの間の相関

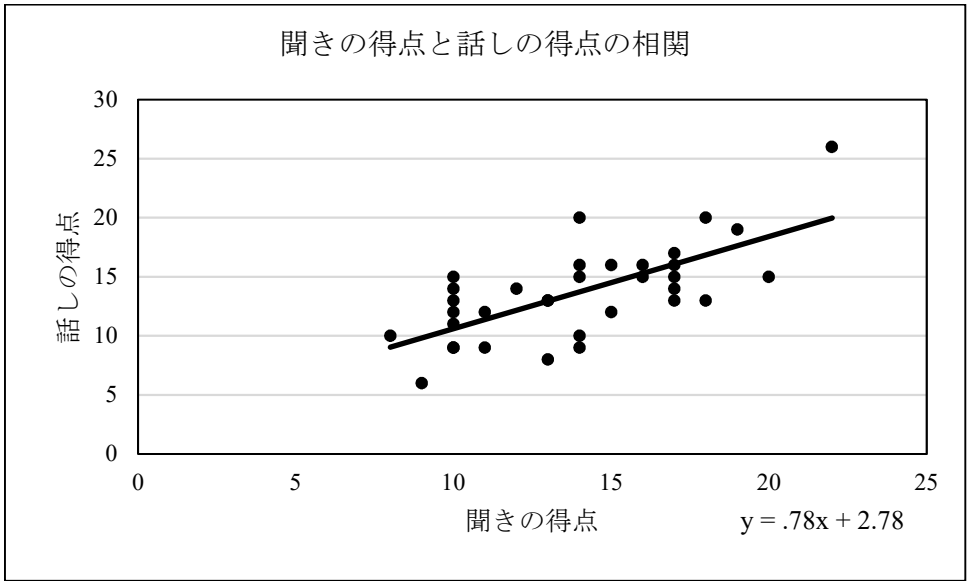
聞きと話しの間に、相関がある（r = .69）。ほぼ r = .70 に近いことから、聞きと話しの間に、おおむね、強い相関があると言える。単回帰分析の結果、この相関の強さは、統計的に有意であると言える。（p < .05 である場合に、統計的有意であると言う。）単回帰分析の結果は、表 5 に示される。

表 5:聞きと話しの間の相関

回帰統計	
重相関 R	.69
重決定 R2	.48
補正 R2	.46
標準誤差	2.93
観測数	34
p 値	*p* < .001

同結果は、図 2 で視覚的により明示的に示される。

図 2: 聞きと話しの間の相関



4.3. 各技能の平均点の地域別比較

岐阜大学学生の TOEFL iBT4 技能得点の傾向は、アジア人（日本語母語話者、中国語母語話者、韓国語母語話者）の傾向と異なる。具体的には、表 6 に示されるように、アジア人全体の 4 技能の平均点は、ほぼ均一で、2 点以内の差しかないが、岐阜大学学生の 4 技能の平均点は、聴解得点が最も低く、最も高い読解得点との間に、3 点ほどの開きがある。表 6 は、ETS （2018）（ETS は、TOEFL iBT 実施団体である）に提示されている、2017 年 1 月から 12 月までの日本語母語話者、中国語母語話者、韓国語母語話者の各項目の平均点である。

表 6: アジア地域受験者の各技能の得点の平均点

	総合得点	読み	聞き	話し	書き
岐阜大学	60.09	16.65	13.68	13.94	16
日本	71	18	18	17	18
中国	79	21	19	19	20
韓国	84	22	21	20	21

5. 終わりに

この調査で明らかになった 3 点を以下に要約する。

1　これまで、センター試験や TOEIC のようなテストでは、読解と聴解の問題しかなかった。ところが、これだけでは、4 技能が測定できないので、話しと書きの問題を加えなければならないという動きがあり、TOEFL iBT のようなテストが必要とされるようになった。しかし、読解と聴解の合計得点と話しと書きの合計得点との間に強い相関があることから、この 2 者は、別個の能力ではなく、それぞれ、関連がある能力であり、読解と聴解問題の得点が与えられれば、その学習者の話しと書きの能力を予測することができる。

2　聞きと話しの得点との間に、おおむね強い相関がり、それぞれ、独立した能力ではないことが分かった。このことから、聞きの得点が与えられれば、話しの得点を予測することができる。

3　岐阜大学学生の TOEFL iBT 4 技能の平均点は、聴解得点が最も低く、最も高い読解得点との間に、3 点ほどの開きがある。このことから、岐阜大学地域科学部学生の改善点は、聴解能力と、それとおおむね強い相関を持つ話す能力を高めることである。

参考文献

ETS (2018) https://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227_unlweb.pdf, Retrieved on October 14, 2018.
柳井久江（1998）『4 Stepエクセル統計』オーエムエス出版，埼玉.

謝辞

本稿を執筆するにあたり、以下の方々に助言を得た。心より、感謝する。久保田信孝氏、Michael Sevier 氏、Toshihide Hamazaki 氏、藤吉淳也氏、横山悟氏。また、TOEFL iBT の得点データ提供を快く許可してくれた 34 名の学生諸氏に感謝する。